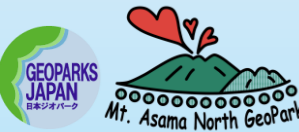


あさまびと Vol. 21

A S A M A - B I T O

地域の成り立ちから、地球の成り立ちを知る
SDGs × ASAMA



天明の噴火から240回忌

江戸時代、天明3年（1783）浅間山の噴火から239年が経ちます。この時の噴火災害は関東一円に及ぶ大きなものでした。特に旧鎌原村は土石なだれで、全村埋まりました。唯一残った建物が鎌原観音堂でした。

そこで生き残った93人が命を繋ぎ、埋まったその土地で復興してきました。そのことを今でも語り継いでいます。

語り継ぎの一つとして、浅間山噴火大和讃があります。そこに唱えられていることを聞くと当時の災害と復興してきた様子がわかります。

なぜ、鎌原では噴火災害と復興を語り続けているのでしょうか。探って、考えてみましょう。



みご（身護）だんごづくり
春のお彼岸の入りに、鎌原観音堂でみごだんごをつくり、お供えをして、先祖の供養を行っています。独特なだんごの飾りかたです。

Stay at Hitoyasumi
代表

アリカワ カナコ
有川 可那子 氏

去年の8月に移住し鎌原の別荘地でStay at Hitoyasumi（ヒトヤスミ）という宿泊施設兼リラクゼーションサロンを始めました。

もともと群馬県高崎市出身ですが沖縄でホテルセラピストとして働いた後、東京での勤務を経て現在はフリーランスとして「癒し」をテーマに活動しています。群馬を離れていたからこそわかる群馬の良さや、「孀恋村」というこの土地ならではの魅力と壮大な浅間山に魅了され、人の温かさを感じながら日々過ごしています。その中で、働き方やライフスタイルの多様化が進み、一拠点に留まらず「もう一つの居場所」の必要性や子供の頃の自然体験の大切さを感じています。

私自身、都会での生活は便利でしたが、窮屈さや生きづらさを感じていました。忙しく過ぎていく毎日の中で、大切なものを忘れてしまうからこそ、「日常から離れ、日常に感謝する」「また明日へと進むためのヒトヤスミができる場所」を作っていきたいです。

また今年に入りジオガイド養成講座に参加させて頂き天明の噴火からの復興の歴史、ここで生き抜いてきた人たちの想い、それを今につなぐ努力や、伝統を知り、より孀恋村が好きになりました。訪れた人に孀恋村の歴史やこの土地の特別なエネルギーを感じて頂けるような宿泊とガイドを組み合わせたプランや地域の方々と交流できる企画もできたらと考えています。

春夏秋冬見える世界が変わる美しい孀恋村に、多くの方が足を運び、自然と自然に癒される体験をしてほしいと思っています。

Stay at Hitoyasumiでの施術の様子▶



やんば天明泥流ミュージアム 学芸員
タカハシ トム
高橋 人夢 氏

天明泥流と埼玉の人々

天明泥流は吾妻川・利根川下流域にも多大な影響を及ぼしました。ここでは埼玉の地で泥流による被災者に思いを寄せた人々に触れたいと思います。

埼玉県内では泥流により河床が上昇して水害を多発させたり、用水路に泥が入り利用が困難になったりと、後世にまで尾を引く被害が出ました。そのような状況から脱するために苦闘した人々を讃えるための碑が現在も各地に残されています。

本庄市（旧児玉町）にある成身院百体観音堂（じょうしんいんひやくたいかんのどう）は泥流の犠牲者を供養するため、住職の元真（げんしん）が建立を決意、師の遺志を受け継いだ弟子の元映（げんえい）が寄進を募り寛政7（1795）年頃に建てられました。現在、元映の功績を記した碑が堂の前に建てられています。

さらに幸手の人々について触れましょう。『浅間山焼昇之記（あさまやましようしょうのき）』には幸手宿を流下する泥流の様子が描かれています。人や馬などの動物の遺体が、多くの家屋とともに流されている様子が表されています。なかには流される家につかまり助けを求める人もいて、川岸では幸手の人々が棹を持って流された人を助けようとしています。また、正福寺にある義賑窮餓之（ぎしんきゅうがの）碑（ひ）には、幸手宿の豪商21人が金銭・穀物を出し合い、飢饉に苦しむ民を助けたことが記されています。

天明泥流ミュージアムには下流都県からも多くの方が来館しますが、展示を通して地域を超えた助け合いや供養する思いがあったことについても学んでほしいと思います。



本庄市 成身院百体観音堂

ジオパークからのお知らせ

◀6/1（水）～6/30（木）まで、長野原町と孀恋村で咲く「夏の花100選写真展示会」が開催されます。花の写真は浅間山北麓で撮影されたものです。前回の春の花に引き続き第2弾となります。

第21回 地質火山地質 ジオスケール

2022年 8/17(水) 8/18(木) 1泊2日

「浅間のいたずら 鬼のヒミツ」をテーマとして、8/17(水)～8/18(木)の1泊2日の間にフィールドワークや実験学習を通して自然現象を探ります。

◀9/23(金)～9/24(土)の2日間にわたり、浅間山北麓ジオパークにてJGN関東大会が開催されます。大会テーマを「伝えよう人と大地の物語」とし、人と大地のつながりを中心に様々なプログラムを予定しております。

発行：浅間山ジオパーク推進協議会
Mt. Asama Geopark Promotion Council
制作：広報・観光委員会
〒377-1524 群馬県吾妻郡孀恋村大字鎌原494-45
TEL/FAX：0279-82-5566
URL：www.mtasama.com
E-mail：asama-geo@ebony.plala.or.jp
Facebook：www.facebook.com/asamageopark

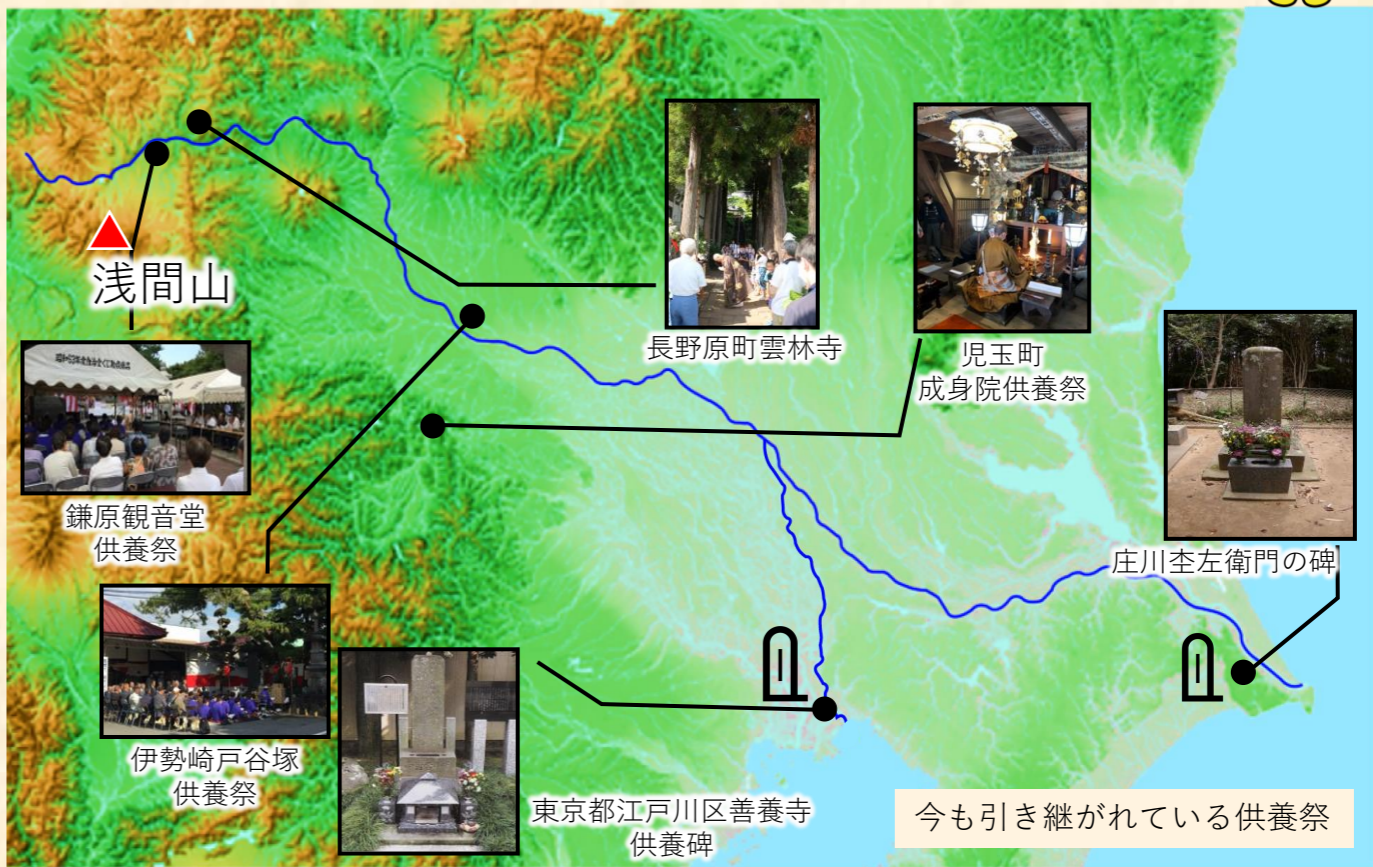
ガイドの受付しています
「浅間山北麓ジオパークガイドの会」の認定ガイドによる案内の受付をしています。ご希望の方は、左記、推進協議会事務局までお申し込みください。
[料金]*ガイド1名あたりの値段
平地：半日6,000円 1日12,000円（参加者11名以上はガイド2名）
軽登山：半日10,000円 1日15,000円（参加者8名以上ガイド2名）
登山：1日25,000円（参加者8名以上ガイド2名）

編集後記
今後は文字と画像のバランスを考慮し、電子書籍としてHPでも閲覧できるようにしたいと考えております。

天明3年（1783）から今も受け継がれるもの



災害伝承の大切さ、時を超えた人の想い、助け合う気持ちは今もかわらないだね。天明3年の浅間山の大噴火をきっかけに色々な方面から助けてくれた人たちを紹介するよ。



今も引き継がれている供養祭

私財による援助を行った黒岩長左衛門

黒岩長左衛門は、浅間山噴火によって壊滅的な被害を被った鎌原村に対し、復興のための積極的な援助を行い、また職を失くした人のために噴火によって湧き出た温泉を大笹まで引く、6kmの引き湯工事の仕事をあてがいました。

そして、後世への戒めとして、蜀山人の協力を得て「災害伝承碑」の建立を行うなど、社会・文教事業も行いました。



湯が冷めた後、鎌原用水として利用している鎌原地区の住民（昭和30年代の様子）

領民を一番に思いやった庄川左衛門

庄川左衛門は天明年間、高崎藩の代官として、当時藩地であった銚子地方に派遣されていました。

銚子は、天明の大飢饉に加え、天明3年浅間山噴火により火山灰が積もり農作物は大打撃をうけました。代官左衛門は、村民に藩の物である米やお金を与えました。それにより領民は生き延びることができましたが、勝手に藩の金穀を出したとして、藩から切腹を命じられたと伝わっています。



庄川左衛門の碑の前で「じょうかん節」を演奏している

心の拠り所を与えた宥弁

東吾妻町原町の顕徳寺の和尚で、天明2年に四国八十八ヶ所に模した新四国八十八ヶ所を西上州にと考えました。しかし、浅間山噴火によりその地は被災を受けました。その被災者への祈りとして鎌原観音堂に薬師如来立像を奉納安置しました。その他にも沼田や安中などにも奉納した仏像があります。これらの供養仏像が災害を語り継ぎ、防災・減災を祈っています。



↑高雲院宥弁の座像
←二体の兄弟仏像、薬師如来立像



熊本藩から義援金

天明の大噴火の際、熊本藩は幕府に命じられて、被害のあった鎌原村をはじめ吾妻川・利根川一帯の復旧費用を負担しました。総額10万両、江戸時代の1両は現在の13万円ぐらいになるので、総額130億円もの大金が普請費として充てられました。



当時の熊本藩主である細川重賢

現代に生きる人

浅間山噴火で被災した人々を助けたのは「人」でした。食料調達、復興作業のための人集め、義援金、雇用、精神的ケア、祈り。これらは今も変わらない姿です。そして「人」によって、災害の記憶が今も語り継がれています。直系の子孫たちが239年間災害伝承を続けてきたのは、孀恋村鎌原が唯一と言われています。時を超えた人の想いを受け継ぎながら、過去の災害を学び、これからの災害に備えて考える機会になることを願います。

ちよこつと豆知識



右の記号は、2019年3月から新たに登録された、「自然災害伝承碑」の地図記号です。

「自然災害伝承碑」は、過去に起きた津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害の情報を伝える石碑やモニュメントをあらわします。

浅間山北麓ジオパーク内の鬼押出し園にも「蜀山人の碑」があります。黒岩長左衛門は、災害の被害を忘れず、将来の噴火に備える大切さを伝えるため、当世、狂歌の第一人者であった蜀山人に撰文と揮毫を依頼しその志を碑として残しました。



蜀山人の碑